



2004年 2 月 29 日 第22号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

第47回日本手の外科学会の 開催にあたって

第47回日本手の外科学会

会長 阿部 宗 昭

(大阪医科大学整形外科教室 教授)

目 次

- 第47回日本手の外科学会の開催にあたって
- IFSSH Budapest と Post-Congress Bucharest
のお知らせ
- 2003年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow
報告記
- ハンドギャラリー(児島コレクション)
- 各種委員会報告
- お知らせ = 学会案内 =
- 編集後記

日本手の外科学会は設立から半世紀を迎えようとしている伝統ある学会であり、会員数も3000名近くを擁する規模の大きな学会です。本学会はこれまで我が国の手の外科の進歩のみならず、より専門性の高い手の外科医の育成の面でも大きな貢献をしてきました。このような学会の第47回学術集会を大阪市において開催させていただきますことは、私個人はもちろんのこと、教室、同門にとりましても誠に光栄なものと存じ、ご支援ご指導いただきました会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

さて、今回の学術集会では「学会に参加することで手の外科の進歩が概観できるように」との基本理念に沿って、講演、シンポジウム、パネルディスカッションを企画しました。内容については本学術集会のホームページ (<http://jssh.gr.jp/osaka47/>) 等を通じてお知らせしてきましたが、この紙面でもその概略を紹介させていただきます。

シンポジウムでは「手の外傷と疾患－治療の最前線」「手の外科領域における最小侵襲手術」の2つのテーマを選ばせていただきました。いずれもその領域のエキスパートの演者に最先端の治療法をお示しいたします。

ビデオシンポジウムは前学会から取り入れられるようになったもので、今学会では「PIP関節脱臼骨折の治療」「Zone IIでの屈筋腱縫合法と後療法」「手指拘縮の治療」の3つのテーマを用意いたしました。手の外科領域で最も治療が難しい各分野の手術手技と後療法をわかりやすく示していただけていると思っています。

パネルディスカッションは7つのテーマを予定しております。「手指の骨折治療－私の工夫」「手のスプリント療法－私の工夫」では、独自のアイデアによる工夫を凝らした治療法を紹介していただきます。「前腕回旋障害の病態と治療」「橈骨遠位端骨折変形治癒例の治療」「絞扼性神経障害－再発例の治療」「デュピュイトラン拘縮」の4つは今までに上げられなかったテーマであり、治療の趨勢を示していただきます。「手の外科のリスクマネジメント」では大学病院、一般病院、クリニックの代表から安全対策を、医学界以外からも安全教育と法的立場からの発言をしていただきます。いずれもレベルの高い発表、討論が期待されます。

講演は5名の演者に依頼いたしました。特別講演の小林 晶先生は、本学会の特別会員であると同

時にフランス整形災害外科学会の名誉会員でもあり、パネルで企画したデュピュイトラン拘縮に関連し、デュピュイトラン男爵がこの疾患を発見した経緯と彼の生涯について、先生自身が何度も渡仏されて集められた資料をもとにお話ししていただきます。他の4名の招待講演も各パネルに関連したものです。手の外傷の臨床経験が豊富な Hill Hastings 先生には「PIP 関節脱臼骨折の治療の趨勢」を、肩や肘のバイオメカニクスの研究の第一人者である Thay Q Lee 先生には「前腕回旋障害のバイオメカニクス」を、米国の手の外科医として最も活躍されている Jesse B. Jupiter 先生には「橈骨遠位端骨折の治療法」を、この分野の権威の1人である Jaiyoung Ryu 先生には「橈骨遠位端骨折変形治療例の治療法」についてお話し頂く予定です。

ランチョンセミナーでは5名の演者にご講演頂きます。そのうち、本学会特別会員の中村純次先生（東京厚生年金病院）には前回に続いて「手の外科の保険診療」をテーマに実際に則したお話を承ります。以上の10講演はいずれも日整会の教育講演として認定される予定です。

本学会での応募演題は396題と過去、最多となりました。プログラム委員の査読の結果、62題が不採用（採択率84.6%）となり、応募いただいた先生方には不愉快な思いをさせて申し訳なく思っております。症例数を増やしたり、内容を高めて次回に再度応募してください。この応募の中から13題をシンポジウム、パネルディスカッションの演題として採用させていただいています。

応募演題から口演とポスターディスカッションを編成させていただきました。会員の皆様の日頃の研究成果をご発表いただけることと期待しております。

なお、学会2日目の23日には同じ大阪国際会議場内で第16回ハンドセラピー学会学術集会、第27回末梢神経を語る会、第42回の手の先天異常懇話会も開催されます。学会翌日の4月24日(土)には第10回春期教育研修会を開催します。こちらも是非ご参加下さい。

本学術集会のホームページ (<http://jssh.gr.jp/osaka47/>) の学会長からのメッセージはすでに3回の発信をしていますが、4月に入ってから最終のメッセージを出す予定です。

最後に、学会開催まで1カ月弱となりましたが、準備は順調に進んでおります。これもひとえにご指導ご協力をいただきました皆様のお陰と感謝しております。来て良かったと思っていただけるようさらに準備を進めて皆様のご来阪をお待ちしております。

IFSSH BudapestとPost-Congress Bucharestのお知らせ

山 内 裕 雄

皆さまご存知のように今年はIFSSH Congressの年です。ハンガリーのブダペストで6月13～17日に開催されます。会長のProf. Renner以下組織委員会の面々は大張り切りで準備しています。なるべく多くの参加者を得たい、そのために日本のわれわれは大いに期待されています。私は1978年ユーゴスラビアのドブロニクで「人工の手」学会があったとき、モスクワからブダペスト経由で行き、4時間も乗り換え時間があったのでブダペストの街に出ってみました。しっとりとした東欧の都会でした。今度はすこしゆっくりとハンガリーを味わってみたいと思っています。学会の詳細・申し込みはすべてインターネット〈www.ifssh2004.com〉経由ですので、ご覧の上、ぜひぜひご参加ください。

Post-Congressは隣国ルーマニアの首都ブカレストで6月19～21日に開催されます。はじめはハンガリー寄りの保養地 Vata でということでしたが、収容人員のためもあってかブカレストになりました。ルーマニア手の外科・マイクロサージャリー学会との同時開催とのこと。舞台回しを4月の日手会にも参加するDr. Jaiyoung Ryuがやっています。ルーマニアはなかなか行けないところですので魅力的

です。この学会もインターネット登録ですので〈www.postifssh2004.ro/〉にアクセスなさってください。

ハンガリー・ルーマニアともに音楽で有名な国です。皆さん6月に東欧でお会いしましょう。

2003年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

三重大学医学部整形外科学教室

平 田 仁

私は埼玉手の外科研究所の平瀬雄一先生と共に、第3回 JSSA-ASSH traveling fellowshipに参加してまいりました。私は1992年に visiting clinician として2ヶ月間 MayoClinic を訪問した以外、長期滞在の経験がなく、両国の手の外科学会のより親密な交流を目的とする program の使節としてどのように振舞ってよいのかと困惑しながらの出発でした。Fellowship はシカゴで開催されたアメリカ手の外科学会から始まったわけですが、実際の fellowship program は Massachusetts General Hospital に Prof. Jesse Jupiter を訪ねるところから始まりました。

MGH の教授というと権威主義の権化のような恐ろしい人物を想像していたのですが、Jupiter 教授は極めて親切で、フランクであり、また、教室にはヨーロッパ、南米、アジアと様々なバックグラウンドをもった人々が所属しており、非常にフレンドリーな環境で交流を持つことができました。

また、最終日には Jupiter 教授の計らいにより世界で始めてエーテル麻酔が実施された Ether Dome において写真を撮っていただき、教室の壁に我々の写真を掲示していただきました。

2 番目の訪問先は Boston Children's Hospital と Schirer's Hospital を拠点に膨大な数の手の先天奇形患者を治療している Harvard Medical School 準教授の Dr. Joseph Upton でした。極めて豊富な経験と知識を持ち、コスメシスにもとことん拘った手術を拝見し、感服の一言でした。何より感心したことは彼が先天奇形手の手術に際し、麻酔の導入が終わると必ず自分で手の陰性モデルを作り、それをオフィスに持ち帰って陽性モデルを仕上げ、保存するという地道な作業を営々と続けていることでした。

アメリカでは形成外科医で手の外科を志向する医師が急速に減少してきているようですが、彼は全米に2人しかいない手の外科のみを治療する頑固一徹な形成外科医でした。2 番目の訪問地は憧れのニューヨークでした。マンハッタンの摩天楼の一角にある Hospital for Special Surgery を訪問したわけですが、Hand & Upperextremity Service の director である Dr. Scott W. Wolfe が直々に我々を空港に出迎え、歓迎をしていただきました。HSS には日本でもおなじみの Dr. Andrew J. Weiland、Campus hinge の開発者の Dr. Robert N. Hotchkiss の3 医師が診療、手術を見学させてくれました。手術症例数は膨大で、症例也多岐に亘り、短期間に極めて多くのことを学ぶことができました。

また、hand fellow, staff と治療に関して議論することも多く、我々の提案を翌日の手術に速やかに取り入れるなど、貪欲で柔軟な姿勢に触れ、アメリカの強さの理由を垣間見た感じがしました。NY での最高の体験はセントラルパーク近くの瀟洒なビルで行われた NY 手の外科医の交流会に連れて行っていただいた際に巡ってきました。あの伝説の巨人たち Dr. Eaton, Dr. Carrol, Dr. Littler, Dr. Beasley と直接話をする機会を頂きました。皆さん既に好々爺といった感じですが、日本訪問の思い出を語っていただきました。自由の女神と ground 0 を訪問した後、第3の訪問地 Pittsburgh へと赴きました。Pittsburgh では Pittsburgh 大学の Prof. Andrew Lee と Prof. Ernest Manders、そして West Virginia Hand & Upper Extremity Center の Dr. Joseph Imbriglia が歓待していただきました。Dr. Lee は中国本土か

ら蒋介石と共に台湾へと移動した高官の子息であり、我々と同世代ですが、冷静沈着で、思慮深い人物でした。アメリカ手の外科学会での彼の同種移植に関するレポートは圧巻でしたが、同種移植の研究に実直に取り組む姿勢をみて、彼から学ぶことは学問を越え極めて多くあるように感じました。

Dr. Imbriglia は気さくな整形外科医であり、手の外科のみならず肘、肩の外科も日帰り手術でこなしてしまう、日本にはめったにいない真の整形外科開業医でした。日本においても自分の技量を存分に展開する場として開業を思考する手の外科医が少しでも増えたら素晴らしいものと思います。

最後の訪問地はNorth Carolina, DurhamにあるDuke Universityでした。親日家で知られるProf. Scot Levinを訪ねたのですが、彼はマイクロサージャリーを用いた四肢再建の現時点でのアメリカのリーダーであり、極めて多くの再建手術をこなしていました。極めて多忙であり、その歩みの早さに平瀬先生ともども着いていくのがやっという感じでしたが、一方で繊細な神経の持ち主で、真心のこもった歓待を受けました。また、彼が中心になって設立し、運営している新鮮凍結遺体の管理施設はすばらしく、今後もcadaverを用いた研究ではアメリカが世界から頭ひとつ出ている状況が続くものと直感いたしました。

約1ヶ月のtraveling fellowを通じ、多くの人々と接触することができ、また、英語アレルギーも寛解し、今後我々が取り組まなければならない多くのことを実感を持って学ぶことができました。また、今回のprogramの中で最も印象に残った事のひとつに同伴頂いた平瀬先生の極めて広い知識と、限らない好奇心、熟成した社交技術が挙げられます。同世代ではありますが、実に多くのことを学ぶことができました。また、彼の存在により我々は紛いなりにも本来のミッションをこなすことができたように感じています。3月4日にはPittsburgh大学のProf. Ernest Mandersが三重大学を訪問してくださることになりました。今回のfellowshipをきっかけに更に少しでも両国学会の交流が盛んになるように努めていきたと考えています。末筆になりましたが、fellowshipの機会を頂いた国際委員会の諸先生、traveling fellowに選出されて以来多くのご助言、ご助力を頂いた別府諸兄先生には心より感謝いたします。

埼玉成恵会病院形成外科・埼玉手の外科研究所

平 瀬 雄 一

平田先生と私の弥次喜多米国旅行の始まりはシカゴで行われた米国手の外科学会でした。何度参加しても余裕を感じさせる学会運営ですが、昨年も華やかで実り多い学会でした。その中でも特に私の興味を引いたのはBunnel fellowとして世界中を回ったDr. Andrew Leeの帰朝報告でした。世界中で行われた14例の同種移植手を実際に診察して回ったというものでした。驚いたことに、殆どの症例は手の知覚回復はなく1例を除いて手内筋は動いていないというものでした。それでも、body imageとしての移植の意義は高いという結論でした。この質の高い報告にわれわれも身を引き締める思いで、いよいよ、最初の地、Bostonへ向いました。

Bostonではまず、Massachusetts General HospitalにProf. Jesse Jupiterを訪ねました。Dr. Jupiterは「気さくなプロフェッショナル」といった感じの方で肘・手関節の手術を見せて頂きました。次に形成外科にDr. Joseph Uptonを訪ねました。Dr. Uptonは非常にレベルの高いこだわりを持った手術をしておられました。特に訪問日を一日延期して見せていただいたradial dysplasiaの手術は芸術的とも言える内容で、先天異常手に対する知識と技術の高さには感嘆いたしました。第三世界からの患者さん達も多く手術されており、「手術は一つの芸術だよ」と言っておられるかのようでした。

次はN.Y.に移りました。Dr. Scot Wolfeのお世話を受けながら、Hospital for Special SurgeryでDr. WeilandとDr. Hotchikissの手術や診察を拝見しました。Dr. Weilandは行動的な印象の方で、手術もその人柄を思わせるもので、「まるで白衣を着たカウボーイのようだね」という平田先生の評に笑ったものでした。Dr. HotchikissはCompus hingeの開発者として有名ですが穏やかなゆったりとした方で、

丁寧な診察は参考になりました。また、N.Y.ではDr.Weilandのお計らいでDr. Eaton, Dr. Carrol, Dr. Littler, Dr. Beasleyらの高名な先生方にもお会いできました。夢のようでした。

次の訪問地はPittsburghでした。Pittsburghは古くは鉄鋼の町でしたが、今ではhealthcareが一大産業となっています。その中核をなすUniversity of Pittsburghに若き教授Dr. Andrew Leeを訪ねました。「冷静な観察者」といった風情のDr. Leeは若いスタッフを束ねて大所帯をまとめておられました。また、Pittsburghから車で30分のところにあるWest Virginia Hand & Upper Extremity CenterにDr. Joseph Imbrigliaを訪ね、2日間お世話になりました。不勉強の私はDr. Imbrigliaのことは事前に何も知識がなかったのですが、米国では珍しい個人病院を開設しておられました。West Virginia Hand & Upper Extremity Centerはday surgeryを中心とした手の外科専門の個人病院で、日本での手の外科専門の有床診療所のお手本となるような施設運営で大変勉強になりました。

最後の訪問地はNorth CarolinaのDuhramにあるDuke Universityに日本でもお馴染みのDr. Scot Levinを訪ねました。Duhramは南部にきたことを強く思わせる小さな町でしたが、Duke UniversityはDuhramの町より大きいのではないかと思うほどの広大な敷地の中にあり、病院は患者で溢れ、Dr. Levinはいつも早足で一日中走り回っているという印象でした。困難な症例が多く、四肢再建外科医にとっては実にやりがいのある職場のようでした。

米国に長期に滞在するといつも思うことですが、この国にはチャンスと希望が溢れているように思います。それは、やったことをきちんと評価しようという姿勢が感じられるからです。

この旅行中に、いくつかの新しい知識やたくさんの友人を得ましたが、最も大きな収穫は我々から彼らに伝えられることもたくさんあると思ったことです。日米両国の手の外科医がお互いの知識や経験を、もっと自由にやりとりできれば世界の手の外科は更なる発展を遂げるであろうと思います。その意味でこのJSSH-ASSH Traveling Fellow制度の意義の大きさを感じました。

最後に、訪問先の設定にあたり、貴重なご意見を頂きました別府理事をはじめとする皆様に深く感謝いたします。



MGH手術室控え室でProf. Jupiterと。左は平田先生、右は筆者。

ハンドギャラリー(児島コレクション)Ⅲ

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児 島 忠 雄

2. 仏像の手

人の手は神様が与えて下さった最高傑作ともいわれています。左右5本の指をもつ人の手は美しく、表情に富むかたち、動きをあやなすことができます。

広隆寺、弥勒菩薩半跏思惟像の思惟の手の美しさに見惚れる人は多いでしょう。仏像の手に象徴的な意味づけがなされることになり、仏像の各部分のなかで、手が他のどこよりも複雑で重要な役割をもつことになりました。手が示している相が印相―手印と言われます。

密教では仏のあらゆる教え、思想、修行の方法などを左右の10指を用いて表現しています。その数は途方もなく多く、一説によると8万4千種と言われているほどです。

仏像の手に興味を抱き、各地の寺院を訪れました。いろいろな手の作品を集め始めましたが、仏像の手を手に入れることは難しく、例え、見つけたとしても高嶺の花でした。日本の骨董市で探した仏像の手の断片(?)、タイで求めたカンボジアの仏像の手、可愛い仏像を納めたインドの合掌する手など10点が展示されています。この写真はクメール朝(12世紀?)の仏像の手です。暖かさが伝わってくるような滑らかな曲線を描く、砂岩に彫られた小さな手です。環指の末節は欠損していますが、中指と手掌で玉を掴んでいます。



各種委員会報告

教育研修委員会

委員長 政 田 和 洋

教育研修委員会の活動は教育研修会の講師の推薦とビデオライブラリーの制作がその主なものでした。春と秋の年2回開催される教育研修会は、従来、日手会の会長の主催で行われておりましたが、昨年の秋の第9回秋期教育研修会から秋期のみ教育研修委員会が主催して行うことになりました。

教育研修委員も8名に増員され、アドバイザー、理事を含めて現在は10名で構成されております。初めて教育委員会の自主運営となった第9回教育研修会は平成15年9月6、7日に東京の大手町サンケイプラザでエーザイ(株)の共催で行われ、参加者は229名と盛況のうちに終わることができました。講演を増やすことを目的に今年からランチョンセミナーを組み入れました。ランチョンセミナーは来年も引き続き行うことにしていますが、反省点として懇親会の出席率の悪さがあげられます。今後、懇親会の形式、要否などにつき検討していく必要があります。委員会主催ということで広報活動にも、限度がありますので、今後、より有効な方法を模索していかなければなりません。若い手の外科医の

さらなる参加を希望してやみません。平成16年度の第10回秋期教育研修会は大阪の帝人ホールでテイジン(株)の共催で行われることになり、すでに講師の推薦も終了しました。会場は大阪の中央部に位置しており、交通の便もよく、たくさんの参加者を見込んでおります。春期教育研修会については従来通り会長の主催で行われることになっており、今年は阿部宗昭会長の主催で行われますが、将来的には秋期教育研修会と同様に教育研修委員会の主催で行ってはどうかという意見があります。秋期研修会については教育研修委員会が作成したマニュアルに沿った内容で講演をしてもらうことにしておりますが、マニュアルの改訂を今後も続けていく必要があります。

ビデオライブラリーの制作については第46回の日手会でのキーンベック病のビデオシンポジウムで発表されたビデオをライブラリーに追加しました。日手会のビデオライブラリーとしては学会で採用されるビデオだけでは偏った内容になる可能性があります。腱縫合や基本的な診察法など、手の外科の基本的な手技を解説したビデオも必要ですので、委員会が個別に依頼して作っていく必要があります。いずれにしてもビデオは今後さらに、その重要性を増していくものと思われます。

日手会の専門医制度についての議論が盛んになっておりますが、手の外科の専門医制度の発足にあたっては教育研修委員会が積極的に関与していく必要がありますが、手の外科学会自体に十分な研修制度がないことが問題です。また研修施設も十分とはいえません。少なくとも、評議員のおられる病院は積極的に研修施設になる必要があるのではないのでしょうか。今後教育研修委員会を頻繁に開催して、専門医制度について議論していくつもりです。このように教育研修委員会の仕事は今後も増加していくものと思われます。

編集委員会

委員長 河 井 秀 夫

日本手の外科学会編集委員会委員は現在、多田浩一、井上五郎、加藤博之、高山真一郎、牧 裕、宮坂芳典と私の7名です。平成15年度から編集委員会委員長を私がお引き受けしています。平成15年5月24日、日本手の外科学会開催時の名古屋市と平成15年10月17日、日本整形外科学会基礎学術集会開催時に北九州市で平成15年度は編集委員会を2回開催しました。日本手の外科学会雑誌は投稿論文(学術集会発表論文、自由投稿論文)および依頼論文などを掲載し、年6回発行していますが、日本手の外科学会雑誌第1号は学術集会抄録集ですので、投稿論文は第2号から第6号までの各号5冊に掲載されます。平成15年度の日本手の外科学会雑誌第20巻への総投稿論文数は158編で和文自由投稿論文1編、英文自由投稿論文3編、和文学術集会発表論文153編、英文学術集会発表論文1編でした。平成15年4月に名古屋市で開催された第46回日本手の外科学会一般演題数は322題でしたので、投稿論文数は発表演題の半数を少し下回っています。

学術集会発表論文はできるだけ学術集会での質疑応答の内容を取り入れて作成する目的で、学会発表後原則として3週間以内に事務局に提出することになっています。提出された投稿論文は日本手の外科学会評議員の先生方に専門分野を特定せず、広く割り振られ査読を受けます。学術集会発表論文は原則座長の先生を含めた査読者2名、自由投稿論文は編集委員を含めた3名で行い、査読結果により書き直しや訂正を適宜求めています。

平成15年度の編集委員会での検討事項の一つは、二重投稿などについての投稿規程の問題でした。検討の結果、重複または二重掲載やプライバシーに関する患者の権利保護などについては、医学雑誌編集者国際委員会(International Committee of Medical Journal Editors: ICMJE)の提示する「生物医学雑

誌への統一投稿規定（2001年10月改定版）」に準じて投稿することを投稿規程に追記することにした。会員の皆様もホームページを開いて、論文投稿時に参考として下さい。

論文の英文校閲証明については、できるだけ英語を母国語とする人による校正を受けてから提出することについての投稿規定は変更せず、タイトルページに英文校閲証明の有無についてチェック項目を追加することにした。学術集会で討議される医療安全や専門医のあり方など会員の皆様の関心が高い話題については、学術集会抄録集が発刊された段階で会長の許可を得て編集委員会で検討し、予め依頼セッションを今後設ける予定にしています。これからも日本手の外科学会の機関紙として理解しやすい、質的に充実した内容の濃い日本手の外科学会雑誌の編集に対して、会員の先生方のご協力、ご指導よろしく願います。

機能評価委員会

委員長 仲 尾 保 志

機能評価委員会は、長野昭担当理事、藤哲アドバイザーのもと6人の委員で構成され、①日本語版DASHの完成と②手の外科機能評価表の改訂を活動方針として取り組んでおります。

DASH（Disabilities of the Arm, Shoulder and Hand）は、ご存知の先生も多いと思いますが、アメリカ整形外科学会の評議会がカナダ・オンタリオ州のInstitute of Work and Healthと共同して作成した、上肢の機能障害を患者さん側から評価するためのスコアリングシステムです。欧米の論文では、共通の評価基準として使われることが多く、日本でも患者さん側の評価の重要性が謳われるようになったため、委員会で日本語版を作成することになりました。すでに翻訳作業は1年前に完了しておりますが、この試案は文化的な違いが十分に検討され、理事会や各種学会の評価委員にも検証をお願いして作成したもので、完成度の高いものと考えています。現在、藤アドバイザーが米国への申請作業を進めており、最終調整を行っている段階ですが、一方で、日本語版DASHの使用範囲を広げるために、試案を用いて手根管症候群の術前術後の評価を行っています。これは、昨年より新委員としてご協力いただくことになった、藤田保健衛生大学の公衆衛生学教室（小野教授）に所属し手の外科学会評議員でもある今枝敏彦先生がデザインしたもので、手術などの治療による反応性も評価できるものを目指しております。順調に作業が進めば、年内の日本語版発行が可能です。

なお、日本語版の試案はすでに完成していますが、これを用いた学会発表、論文の作成につきましては、米国サイドが許可しておりませんので、ご理解のほどお願い申し上げます。

次に、手の外科機能評価表の改訂作業ですが、①腱損傷の機能評価（担当：西田淳委員）、末梢神経損傷の機能評価（担当：平田仁委員）、③再接着手・指および複合損傷手の機能評価（担当：斎藤覚委員）、④手関節障害の機能評価（担当：伊地知正光委員）の4項目について検討を行っています。評価表を作製するにあたっては、まず評価基準を確立することが必要という認識から、末梢神経麻痺は手根管症候群、腱損傷は屈筋腱断裂、手関節障害は橈骨遠位端骨折、再接着手・指については指の再接着に焦点を絞って、実用的な評価基準を作るべく作業を進めています。

最後に、今年の4月より、長野担当理事、伊地知委員（定年）、斎藤委員（個人事情）、平田委員（満期）、仲尾委員（満期）が交代になります。ただし旧委員は、DASHの早期の完成にむけて、退任後も試行に協力していきたいと考えています。

用語委員会

委員長 浜 田 良 機

日本手の外科学会用語委員会は、2002年4月11日に手の外科用語集改訂第二版の発行後、次のステップに向けての英気を養っていましたが、平成15年度は次の改訂に向けての活動を開始しました。第二版は委員全員が十分に検討したものではありませんでしたが、実際にはいくつかの誤植や用語の解釈の不備がありました。そこで多くの先生方からのご意見を頂いての改訂が必要と考えて、評議員の先生方にアンケート調査いたしました。評議員198名中58名の方々からご回答を頂きました。あらためて御礼申し上げます。

そこでご指摘頂いた内容を十分に検討した結果、来年度からの改定作業に生かしていきたいと考えております。委員長は任期を終了して交代する予定ですので、このアンケート結果を尊重しつつ改訂作業を進めることを確実に引き継ぐように致します。

次に第三版の用語集の体裁が検討されました。現在はB5サイズの冊子となっています。改訂第三版からは日本手の外科学会発行となりますので、経済的なことも考えつつより使い易いものに変更したいと考えております。その第1案はCD化です。第2案は学会誌への綴じ込み。第3案は装丁の簡素化。第4案は従来通りでありました。現在のコンピュータの普及を考えればCD化するのが適切との意見が委員会の大勢であります。しかし会員の年代も考えて改訂第三版は将来のCD化を目指して、CDを添付した冊子とするということに決定しました。装丁の簡素化については次期委員会へ引き継ぎます。

第3の課題は用語集の校正であります。第二版では委員全員が目を通していくつかの誤植や語句の解釈の不備がありました。これを改善する方法は、数多くの目を通して校正することです。またより使い易かつ適切な用語の収載と解釈という点からは多くのご意見を参考にさせて頂くということが大切だと思います。その意味で先のアンケート調査を行いました。具体的な校正作業については、全評議員の先生方をお願いすることが委員会で検討されました。理事会でのご了承が得られれば、来年度の評議委員会の席で正式をお願いする予定です。その場合お一人のご担当頂く頁数は現在の用語集の2頁程度となります。

お手数とは存じますがご協力をお願い申し上げます。

広報委員会

委員長 田 中 寿 一

本年度の広報委員会の活動をご報告いたします。

事業は例年通りの日手会ニュースの編集・発行と手の外科パンフレット、インターネットのホームページの充実と学会グッズの作成でした。

伊藤恵康担当理事のもと、委員は小生と高原政利先生、池上博泰先生、谷口泰徳先生、島田幸造先生、鈴木康先生で構成され、本年度も年に2回の委員会を開催しました。

- 1) 日手会ニュースは、平成15年9月30日に第21号を発行し、本22号を発行しました。(同時にインターネットホームページへも掲載)興味ある企画などあれば、是非お伝え下さい。(鈴木・高原委員)

2) 手の外科パンフレットは、19. 上腕骨顆上骨折（島田委員）、20. 術後の注意点、ケア(原案：土井一輝先生、谷口委員) 21. 肘内障（原案：浜田良機先生（日整会）、谷口委員）が完成し、22. RA伸筋腱皮下断裂（谷口委員）23. RAの手指変形（高原委員） 24. 母指MP関節靱帯損傷（池上委員）が作成校正中です。さらに、これまでのパンフレットの修正・訂正を行うべく、見直し作業に入る予定です。

3) インターネットホームページ

全会員の UMIN ID 取得後の会員専用ページの立ち上げについての方向性として、a. 広報（一般向け・会員向け(open)、b. サービス（会員のみ-closed)、c. 会計関連、d. 協賛企業向けの4つのジャンルに分け、その方向性を検討中です。特にbは、学会員専用のページで、学会誌閲覧、論文検索、論文・学会発表受付、論文査読、さらに症例相談、登録など会員相互の利便性を計る最も大切な項目となる予定です。また、新たに、協賛企業を募集し、経済面でもホームページの内容充実の向上をはかる予定です。（島田委員・池上委員）

4) 学会グッズの選定：新潟の手の外科学会にて発売した第1号グッズーネクタイと昨年第2号としてピンバッジ・ネクタイピン（一故藤巻先生の図案）は、好評発売中です。第3号として携帯ストラップを作成し、今年の東日本・中部両手の外科研究会にて試売し、4月の学会(大阪)にて本格的に発売予定です。会員自身の購入も含め、活用をお願いするものです。（田中委員）

5) 日本医学会総会の展示

理事長の命を受け、2003年4月福岡で開催された第26回日本医学会総会(すこやかメッセ2003)で公開展示を行い、連日大好評でした。（日手会ニュース第21号参照）その際作成したDVDの活用を検討中です。

以上、本年度の活動をご報告いたしました。本委員会はホームページの充実、新パンフレット作成、グッズの拡充など、伊藤理事の舵取りのもと精力的に活動を行うことができました。しかし、次年度は私を含め委員の大幅な交代時期になりました。この精力的な活動を維持し手の外科の啓蒙にさらに邁進していただきたく新委員の先生方をお願いすると共に、会員の先生方の叱咤、激励をお願いいたします。

社会保険等委員会

委員長 立花 新太郎

今年度も当委員会の2つのミッション、すなわち1. 外保連活動と 2. 学術集会での保険診療に関するランチョンセミナーの総括と準備を遂行しました。

外保連活動においては、実務、手術、処置、各委員会に分担して出席し、外保連試案作成に参加しました。また、平成16年4月の診療報酬改定に向けて、本学会の要望項目を取りまとめました。

本学会の診療報酬重点改定要望項目として、

1. 手舟状骨偽関節手術

手舟状骨偽関節手術が、手舟状骨骨折観血的手術よりも難易度が高いにも拘わらず低い点数となっていることの改正

2. 茎状突起管開放術

茎状突起管解放術が、腱鞘切開術よりも低い点数となっていることの改正

3. 複数手術に係わる経費の特例

手指、中手指、手関節に限るとされているものを、前腕まで拡大すること

の3点を外保連を通じて改正要望いたしました。この要望書を厚生労働省医療局保険課に直接持参し陳情し、また、日本医師会疑義解釈委員会にも提出いたしました。

今般発表されました診療報酬改定の内容では、残念ながら本学会の要望項目は取り上げられませんでしたが、しかし以下の2点については、本学会にとって好ましい改定であったかと思います。

1. 早期リハビリテーション加算が以下の2点についても算定可能となったこと
 - ・四肢（手部、足部も含む）の骨折、切断、離断、腱損傷
 - ・四肢の熱傷
2. 手術施設基準の暫定的見直しが行われたこと
 - ・基準を満たす場合 105/100の加算
 - ・医師経験年数基準（当該手術に関して10年以上）を満たす場合減算なし
 - ・基準を満たさない場合 30/100の減算

今回の診療報酬改定については、学術集会で行われる中村純次先生のランチョンセミナーにおいて解説が行われますので、是非多くの会員の参加をお待ちしております。

先天異常委員会

委員長 川 端 秀 彦

例年、先天異常委員会は“手の先天異常懇話会”を定期業務として、日本手の外科学会総会の会期中に開催しております。時間に制限がある関係で会員緒先生方に十分満足していただける会になっていなかったとの反省から、今年は2回開催することにいたしました。まず、中部手の外科研究会の第21回研究会会長梁瀬義章先生のご厚意で2月20日の夕刻から中部手の外科研究会の会場を引き続き使わせていただいて開催できることになりました。ここでは症例検討を十分に行えることと思います。もう1回は大阪医科大学阿部宗昭教授のもとで開催される第47回日本手の外科学会学術集会の会期中にレクチャーを中心として行います。ここでは東京医科学研究所の池川志郎先生に手の先天異常と遺伝子との関係についての最近の知見をお話ししていただくことにしており、そのあとで時間が許せばレクチャーに関連する症例を少数検討できればと思っています。日手会ニュース・日手会誌・抄録集とホームページにお知らせを載せておりますのでご参照下さい。懇話会当日はたくさんのご参加をお願いいたします。

“手の先天異常の分類”については一応の結論を出しましたが、さらに先天異常委員会の分類で用いる用語と手の外科用語集との整合性を、用語委員会と協力して図っていきたいと考えております。

評価委員会の御指導のもとに作成しておりました“母指多指症の評価基準”は術後成績評価表として完成いたしました。委員会委員以外の多くの先生方にもご協力を頂きました。ここで改めてお礼申し上げます。近いうちに会員の先生方にも御覧になっていただける予定です。ぜひ試用され、屈託のない御意見を賜わり、さらに良いものにしてゆきたいと考えております。

日常診療で比較的良好に遭遇する先天異常手疾患についての“患者向けパンフレット”の作成を、広報委員会と協力して開始いたしました。その第1弾として合指症のパンフレットが完成しつつあります。

近い将来を見据えて“委員会ホームページ”の作成に取りかかっております。その中で症例登録システムや先天異常相談システムの設置も前向きに進めていく予定です。

以上、手の先天異常は大きな領域ではありませんが、その特殊性から多岐にわたる活動を行っています。

国際委員会

委員長 矢島 弘嗣

平成15年度の国際委員会の活動について報告します。平成14年度最後の国際委員会ならびに15年度最初の委員会は、平成15年4月19日に名古屋で開かれ、2回目の委員会は12月19日に東京で行われました。本委員会の仕事としては、1) Corresponding memberの選出、2) JSSH/ASSHならびに JSSH/KSSH traveling fellowの選出 3) Bunnel traveling fellowならびに KSSH traveling fellowの日本での日程調整、この3つが最も重要なものであります。

1) に関しては、本年度推薦のあった Prof. Beat R. Simmen (Switzerland), Prof. Panupan Songcharoen (Thailand)の2名について、審議の結果、いずれも適格であるとし理事会に推薦することとしました。なお現在65歳を越えられている memberが何人かおられるので、今後調査を行って Honorary memberに推薦するような手続き行なう予定であります。2) に関しては、昨年 JSSH/KSSH traveling fellowとして選出された安田匡孝先生（大阪労災病院）が、SARSのために今年度に繰り越しとなったため、16年度の新しいfellowの募集は行ないませんでした。JSSH/ASSH traveling fellowには10人の先生が応募され、各々の業績、留学歴などを吟味したうえで投票を行って、柿木良介先生（京都大学）と面川庄平先生（医真会八尾病院）が選ばれ、理事会に推薦しました。3) に関しては、今年度の Bunnel traveling fellowとして Dr. Kevin Chungが選ばれており、日本での訪問先として、聖マリアンナ医大、北海道大学など7つの施設を訪問する予定です。もちろん大阪で行なわれる日本手の外科学会には出席します。

その他の報告事項として、第4回日米合同手の外科会議が2005年3月19日（土）～22日（火）の期間でハワイ州オアフ島の Hilton Hawaiian Villageで行なわれることを皆様にお伝えします。今回は米国側が主体となって運営されることとなります。

なお国際委員会そのものの活動ではありませんが、前および現国際委員会委員が中心となって、生田義和会長、別府諸兄組織委員長のもと第5回アジア太平洋手の外科学会（2004年11月12日～15日）の準備に追われております。本学会を成功させるためにもできるだけ多くの日本手の外科学会会員の方に参加をお願いいたします。

専門医等検討委員会

ワーキンググループ1グループ長 土井 一輝

手の外科専門医に関する意見をお聞かせください。

日手会では平成15年4月の第46回日手会総会で決定後、日手会認定・手の外科専門医制度の立ち上げに向けて、専門医等検討委員会を中心に専門医制度の内容の検討に入っています。本制度は日本の手の外科の将来を左右する重要問題でありますので、広く会員の先生方のご意見を参考にいたしたく存じますので、積極的にご意見をいただきたく存じます。

現在の委員会の立案（あくまでもたたき台であります）は日手会ホームページに近日中に掲載する予定でありますので、参考にいただければ幸甚に存じます。この立案へのご批判をはじめ、例えば、手の外科専門医の数はどのくらいか（会員3000人の何割か）？

何年くらいの研修が必要か？ 手術症例数を条件に加えるか？ 自分は専門医になりたいか？など忌憚のないご意見をお知らせください。

香港から日本に移転したJournal of Hand Surgeryの編集室から

編集長 生 田 義 和

Journal of Hand Surgeryの編集業務が平成14年5月に香港から日本に移ってから1年10ヶ月が経過しました。移転して7ヶ月目に発刊された7巻2号(2002年12月)には、香港で採用された論文のみ24編を掲載し、翌年に発刊した8巻1号(2003年9月)には香港採用10編、日本採用13編の合計23編を掲載、さらに本年2月発刊予定の8巻2号には全て日本で採用された22編を掲載しています。

日本に移転後に投稿された論文数は104編(平成16年1月26日現在)で、月平均4.7編の投稿で、編集室はうれしい悲鳴をあげています。このため金谷文則先生、藤 哲先生、三浪明男先生の3名のEditorial Boardとして発足したものの査読の分量が多く、急遽Editorial Board Associateとして石田治先生、平瀬雄一先生、井上五郎先生、牧 裕先生の4名に加わっていただき、さらに山内裕雄先生と玉井 進先生の2名の心強いEditorial Advisory Committeeに参加していただき、別府諸兄先生のAssistant EditorとEditor in Chiefの生田が総括的な業務に携わっております。本邦以外に編集に関与している方々はCo-EditorのM.A. Tonkinをはじめ、Editorial Boardが11名、Editorial Advisory Committeeが4名、Corresponding Editorが11名です。

さて、先に述べた104編の内、採用決定は49編、不採用は10編、校正中が16編、査読中が27編、投稿直後1編です。この数値からお分かりのように、採用と校正を合わせて65編、校正中の原稿がすべて採用になると約87%の採用率となります。この採用率は今後の投稿原稿数や原稿の内容の質によって変化するであろうが、少なくとも厳しくなっていくことが予想され、編集室としてはうれしい限りです。

日本手の外科学会会員の皆さんには、編集室が香港から日本に移り、私たちの仲間が査読をするという折角の好機を十分に生かしていただき、多くの方々からの投稿を期待し、また多くの方々の雑誌購読をお願いしたいと考えています。日本からの投稿原稿数の増加が雑誌の質の向上に必ず繋がると確信しております。そして、現行の年2冊の発刊を、将来は3冊の発刊が可能になるように、また世界中から原稿が集まり、引用回数が増加するように努力していきたいと考えています。皆様のご協力をお願い申し上げます。

第5回アジア太平洋手の外科学会 (5th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand) の準備状況

Organizing Chairman 別府 諸兄

昨年は3月以来、問題となっていたSARS（急性重症呼吸器症候群）について、先行きが不透明であり、危険を冒して強行するより、多数の国々から多数の参加者を迎え開催できる状況において行うべきであるとする Asian Pacific Federation of the Societies for Surgery of the Hand Michael Tonkin 会長ならびに第5回学会準備委員会からの答申により学会を延期いたしました。また、この延期に伴い Announcement の再作成（Revised 版）、発送等準備に伴う経費が二重に必要となるなど日本手の外科学会には、大変な負担となりご迷惑をおかけしました。

延期後の開催日、開催地は下記の通り予定いたしました。

開催日：平成16年11月12日(土)～15日(月)

開催地：大阪市/大阪国際交流センター（同一会場）

APFSSH の参加国は13カ国、オーストラリア、香港、インド、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、ニュージーランド、パキスタン、フィリッピン、シンガポール、台湾、タイであります。これらの国の個性溢れる手の外科専門家が2年に1回一同に集まり研究の成果を発表する学会であります。これまで、第1回オーストラリア(パース)、第2回シンガポール（シンガポール）、第3回インド（チェンナイ）、第4回韓国（ソウル）、何れも主催国の手の外科学会の周到な準備と素晴らしい hospitality で学会は盛り上がりました。

アジアの手の外科の大国である日本が第5回の主催国として11月に大阪で開催することになり、日本手の外科学会が総力を挙げて準備をしております。Scientific Committee の矢島弘嗣委員長は、アジアからの多くの先生が発表できるように鋭意努力をしております。昨年延期した時点で演題登録数は約250題でその内約半数が海外からのものでした。今回はさらに口演、ポスター合わせてさらに150題計400題の採用を予定しています。是非、国内・外からの多くの発表を期待しております。また、Social Committee の石田 治委員長は12日の Welcome Party（都ホテル）、13日の Japan Night（太閤園）、14日の Presidential Banquet（都ホテル）を準備しております。Related Conference の光嶋委員長は第1回日・伊ハンドクラブ（藤会長）、第1回アジアハンドセラピスト学会（椎名会長）などを予定しております。

最後に、重要な Fund Raising Committee の南川委員長を中心に、準備委員会委員は現在、東奔西走して寄付のお願いをしております。24年に1回しか開催国の機会のない APFSSH を Academic で思い出深いものにしたいと思います。これも偏に日本手の外科学会の会員の皆様のご協力を無しには成し得ないと考えております。

さらに、APFSSH の official Journal である Hand Surgery は現在、日本手の外科学会理事長である生田義和先生が Editor in Chief であります。この雑誌は2002年から日本が事務局を預かるようになり、査読システムも確立し、投稿数も増加してまいりました。その結果、年に2刊を年に3刊にする必要性がでてきています。Journal of Hand Surgery のA版（米国中心）、B版（ヨーロッパ中心）であります。アジアの手の外科中心となる雑誌 Hand Surgery をさらに育て、A/B版に勝る雑誌にしたいと考えています。

……お知らせ……

手の外科研修施設一覧

研修内容などの詳細は日手会ホームページをご覧ください。

研修希望者は各研修施設に直接申請、交渉を行ってください。教育研修委員会および日本手の外科学会は研修医の申請、および研修に関しては一切、関与いたしません。

施設番号	施設名	研修責任者	住所	TEL
1	北海道大学医学部附属病院整形外科	三浪明男	060-8638 札幌市北区北15条西7丁目	011-716-1161
2	大阪労災病院	政田和洋	591-8025 堺市長曽根町1179-3	072-252-3561
3	山口県厚生連小郡第一総合病院	土井一輝	754-0002 山口県吉敷郡小郡町下郷862-3	083-972-0333
4	新潟手の外科研究所	吉津孝衛	950-0965 新潟市新光町1-18	025-283-0306
5	済生会山形済生病院	清重佳郎	990-8545 山形市沖町79-1	0236-41-0849
6	東京手の外科/スポーツ医学研究所	山口利仁	192-0002 八王子市高月町360	0426-92-1115
7	埼玉手の外科研究所	児島忠雄	355-0072 東松山市石橋1721	0493-23-1221
8	聖隷浜松病院 手の外科・マイクロサージャリーセンター	斎藤英彦	430-8558 浜松市住吉 2-12-12	053-474-2222
9	鈴鹿回生総合病院	藤澤幸三	513-0836 鈴鹿市国府町112-1	0593-75-1212
10	医療法人あかね会 広島手の外科・微小外科研究所	津下健哉	730-0811 広島市中区中島町9-5 三津石ビル3階・4階	082-544-1227
11	大阪厚生年金病院	正富 隆	553-0003 大阪市福島区福島4-2-78	06-6441-5451
12	名古屋掖済会病院整形外科	渡邊健太郎	454-0854 名古屋市中川区松年町4-66	052-652-7711
13	弘前大学医学部附属病院整形外科	藤 哲	036-8562 弘前市在府町5	0172-33-5111
14	広島大学整形外科	越智光夫 石田 治	734-8551 広島市南区霞1-2-3	082-257-5232
15	Nara Combined Program in Surgery of the Hand(奈良マイクロサージャリー・手の外科研究所, 奈良県立医科大学整形外科)	玉井 進	631-0024 奈良市百楽園5-2-6 (西奈良中央病院)	0742-43-3333
16	新潟県立瀬波病院リウマチセンター	石川 肇	958-8555 村上市瀬波温泉2-4-15	0254-53-3154
17	山口県立中央病院	酒井和裕	747-8511 防府市大字大崎7	0835-22-4411
18	愛野記念病院	貝田英二	854-0301 長崎県南高来郡愛野町3838-1	0957-36-0015

日本手の外科学会第10回秋期教育研修会

会 期：平成16年9月4日(土)，5日(日)

会 場：テイジンホール

〒541-0054 大阪市中央区南本町1-6-7 帝人ビルディング内
地下鉄中央線・堺筋線「堺筋本町」2番出口

会 長：斎藤 英彦（日本手の外科学会教育研修委員会 担当理事）

企 画：日本手の外科学会教育研修委員会

※日本整形外科学会，日本形成外科学会の教育研修講演単位として申請の予定です。

共 催：帝人株式会社

受 講 料：20,000円（テキスト代，日整会教育研修会受講料，懇親会費を含む）

申込方法：官製はがきに氏名・連絡先住所・連絡先電話番号/ファックス番号・勤務先・卒業
年度をご記入の上，下記申込先あてお申し込みください。

申込締切：7月末日 ※先着200名とさせていただきます。

申 込 先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013

日本手の外科学会事務局「日手会第10回研修会事務局」宛

TEL 052-836-3511/FAX 052-836-3510

プログラム(予定)

9月4日(土) 第1日め

13:55 開会式

14:00～15:00 手の外科診察に必要な機能解剖

加 藤 博 之（信州大学整形外科）

15:10～16:10 神経

岡 島 誠一郎

（京都府心身障害者福祉センター附属リハ病院）

16:20～17:20 陳旧性を含めた屈筋腱損傷

坪 川 直 人（新潟手の外科研究所）

9月5日(日) 第2日め

9:00～10:00 肘の骨折

田 嶋 光（熊本整形外科病院）

10:10～11:10 手根骨損傷，Kienbock

香 月 憲 一（大阪市立大学整形外科）

11:20～12:20 手の皮弁，マイクロ

木 森 研 治

（医療法人あかね会土谷総合病院整形外科）

12:40～13:40 手のリハビリテーション：ハンドセラピーの理論と実際

斎 藤 英 彦

（聖隷浜松病院手の外科マイクロセンター）

14:00～15:00 TFCC

中 村 俊 康（慶應義塾大学整形外科）

15:10～16:10 先天異常

金 谷 文 則（琉球大学整形外科）

16:10～ 閉会式

日本手の外科学会 教育研修ビデオライブラリー

只今2004年度最新版のビデオライブラリーを製作中です。第47回日本手の外科学会会期中に閲覧いたします。

希望者には実費（1本3,000円）で頒布いたしますので、事務局受付でお申し込みください。

巻数	タ イ ト ル	講 師
1	腱移行術	津下 健哉
2	手の外科医に必要な皮弁の挙上法	土田 芳彦 他
3	橈骨遠位端骨折に対する種々の手術的治療法	斎藤 英彦 他
4	鏡視下手根管開放術	奥津 一郎 他
5	手関節鏡	玉井 和夫 他
6	Dupuytren 拘縮の手術 有茎血管柄付き DIP 関節を利用した指 PIP 関節再建のコツ	福居 顕宏 黒島 永嗣
7	Herbert Screwによる舟状骨偽関節手術	井上 五郎
8	腕神経叢損傷全型麻痺の再建手術： Double Free Muscle Transfer法(新版)	土井 一輝
9	リウマチ手関節の手術	政田 和洋
10	母指再建術①②	川端 秀彦 他
11	母指再建術③④	稲田 有史 他
12	遊離筋膜脂肪弁移植を用いた先天性近位橈尺骨癒合症の授動術	金谷 文則
13	手の外科手術手技 (1)	津下 健哉 木森 研治
14	手の外科手術手技 (2)	津下 健哉 木森 研治
15	手の外科手術手技 (3)	津下 健哉 木森 研治
16	手の外科手術手技 (4)	津下 健哉 木森 研治
17	指尖切断の被覆法	土井 一輝 他
18	手の外科手術手技 (5)	津下 健哉 木森 研治
19	手の外科手術手技 (6)	津下 健哉 木森 研治
20	手の外科手術手技 (7)	津下 健哉 木森 研治

2004年度最新版

21	Kienböck病の手術	安田 匡孝 他
22	PIPJ骨折牽引療法 指尖部切断再接着	黒島 永嗣 服部 泰典
23	尺側手関節部痛に対する尺骨楔状短縮骨切り術	吉田 竹志
24	手の外科手術手技 (8)	津下 健哉 木森 研治
25	手の外科手術手技 (9)	津下 健哉 木森 研治

第3段グッズ完成! 今回は携帯電話ストラップです

広報委員会が精力的に手のグッズを商品化しておりますが、第3段は携帯電話の画面を拭く便利なストラップが出来上がりました。ゲー、チョキ、パーの3種類で1個600円とお手頃価格です。

第47回日手会会期中に事務局デスクで販売いたしますのでおひとつ是非どうぞ。

その他、ネクタイ、ピンバッジも販売いたします。

また商品化して欲しいグッズなどございましたら、是非広報委員会へお知らせください。



イラスト：蜂須賀裕己先生（広島大学整形外科）

海外留学・旅行記・体験記を公募します

海外留学や旅行記、体験記などを日手会ニュースに掲載しませんか。

文字数は2000文字程度。写真1～2枚を添えて事務局宛お送りください。

皆様からの投稿をお待ちしております。

関連学会・研究会のお知らせ

第47回日本形成外科学会学術集会

会 期：平成16年4月7日(水)～9日(金)

会 場：東京都／京王プラザホテル

会 長：野崎 幹弘（東京女子医科大学形成外科）

問合せ先：〒160-8666 東京都新宿区河田町 8-1 東京女子医科大学形成外科内

TEL 03-3353-8111

E-mail : <mailto:jsprs-office@umin.ac.jp>

詳細は<http://plaza.umin.ac.jp/~PRS47th>

第43回手の先天異常懇話会

会 期：平成16年4月23日(金) (第47回日手会第2日) 12:35～13:45

会 場：大阪国際会議場 1202会議室（第5会場）

演 題：四肢の先天異常と遺伝子解析

連絡先：〒594-1101 大阪府和泉市室堂町840

大阪府立母指保健総合医療センター整形外科 川端秀彦

email: hk@mch.pref.osaka.jp

第16回日本ハンドセラピィ学会学術集会

会 期：平成16年4月23日(日) (第47回日手会第2日) 9:00～16:30 (受付開始 8:15)

会 場：大阪国際会議場 5階小ホール

演 題：肘関節（前腕を含む）に対するセラピー

参加費：医師 無料（抄録代は別途500円頂戴いたします）

会 員 3,000円

非会員 5,000円

学 生 500円

連絡先：〒569-8686 高槻市大学町 2-7

大阪医科大学附属病院リハビリテーション科 谷村 浩子

TEL 079-683-1221 (内2709) / FAX 079-684-6336

email: reh028@poh.osaka-med.ac.jp

第26回末梢神経を語る会

会 期：平成16年4月23日(金) (第47回日手会第2日め終了後) 18:00～20:00

会場：大阪国際会議場 1003会議室（第2会場）

テ ー マ：人工神経に関する最近のトピックス

講演：1. ラミニンペプチドとヒト除神経筋由来神経突起慎重因子 rhMDP77 の神経再生促進効果
東京医科歯科大学疾患遺伝子実験センター 伊藤聰一郎

2. Tissue Engineering を応用した人工神経の開発

慶應義塾大学整形外科 仲尾 保志

3. 損傷された末梢神経を再生させる方法の開発

京都大学形成外科 鈴木 義久

4. PCA-Collagen tube によるヒト末梢神経損傷に対する生体内再生医療

奈良県立医科大学救急科 稲田 有史

世話人：梁瀬義章，河井秀夫，岡島誠一郎

共催：エーザイ株式会社

※会場費として1,000円を徴収させていただきます。

※本会は日本整形外科学会教育研修会として認定（日整会専門医単位：1単位）を予定しております。

※受講証明書をご希望の先生は受付にてお渡しいたします（但し認定医に限ります）。

※研修医で単位取得希望の先生は研修手帳をご持参ください。

第6回リウマチ手の外科研究会

会期：平成16年5月21日（金）15時～

会場：神戸市／神戸商工会議所 3階神商ホール

詳細は<http://www.ra-hand.com/>

第23回新潟手の外科セミナー

会期：平成16年8月5日（木）～7日（土）

会場：新潟市／新潟大学医学部第3講義室

共催：財団法人新潟手の外科研究所，新潟大学整形外科・形成外科手の外科班

講師：斎藤英彦（聖隷浜松病院），三浪明男（北海道大学），関利明（新潟市民病院）
金谷文則（琉球大学），藤哲（弘前大学），今井春雄（今井整形外科）
石川肇（新潟県立瀬波病院），吉津孝衛，牧裕，坪川直人（新潟手の外科研究所）

日本整形外科学会教育研修会：6単位（申請中）

対象：整形外科または形成外科の基礎研修を修了し，手の外科の症例を3年程度経験した上で，より深く手の外科の基礎と主要問題について系統的に研修することを希望する若い医師

参加費：35,000円（テキスト代金を含む）

申し込み方法：官製ハガキに氏名，勤務先とその住所（含TEL），卒後年数を記入して6月30日迄に下記宛に送付，もしくは<http://www.tenogeka.com/>を参照

（財）新潟手の外科研究所 手の外科セミナー 係

〒950-8556 新潟市新光町1-18

第15回日本末梢神経学会

会期：平成16年8月27日（金）～28日（土）

会場：つくば市／つくばエポカル国際会議場

会長：落合直之（筑波大学臨床医学系整形外科）

問合せ先：〒305-8577つくば市天王台1-1-1筑波大学臨床医学系整形外科学教室内

TEL 0298-53-3219

第12回日本形成外科学会基礎学術集会

会 期：平成16年10月9日(木)～10日(金)
 会 場：東京都／京王プラザホテル
 会 長：中島 龍夫（慶應義塾大学形成外科）
 問合せ先：〒160-8582 東京都新宿区信濃町35 慶應義塾大学形成外科内
 TEL 03-3353-1211

第31回日本マイクロサージャリー学会

会 期：平成16年10月14日(木)～15日(金)
 会 場：熊本市／熊本市民会館
 会 長：中島 英親（熊本機能病院 副院長）
 問合せ先：〒860-8518 熊本市山室6-8-1 熊本機能病院内
 TEL：096-345-8111 FAX：096-346-1325
 詳細は <http://www.ics-inc.co.jp/micro31/>

5th Congress of APFSSH

会 期：平成16年11月12日(金)～15日(月)
 会 場：大阪市／大阪国際交流センター
 会 長：生田 義和（広島鉄道病院）
 演題締切：平成16年5月10日予定
 問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有)ヒズ・ブレイン内
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510
 E-mail：apfssh@jssh.gr.jp
 詳細は <http://www.jssh.gr.jp/5apfssh/>

事務局だより

電線に止まっているカラスがやたら目につく今日この頃、皆様お元気でお過ごしでしょうか。

SARSが終焉したかと思ったら、今度は鳥インフルエンザ。会員の先生から5th APFSSH開催について「前はSARSで延期になったが、今回は鳥インフルエンザで延期になるのでしょうか…」と心配のお電話をいただきました。またまた延期？いえいえ嵐が来ようと風が吹こうと開催に向けて、着々と準備を進めております。昨年登録済の演題をそのまま活用しますが何せ365日も前の事、登録された先生方も登録したのか未登録なのかすっかり忘れ？月日は経っていいものか悪いものか悩む所です。プログラムの決定は7月頃になります。

4月の入学式の頃には桜がつきものですが、今年は例年より桜の開花日が全国的に早いようで、この方程式もくずれそうです。暖かい日が続いておりますが、花冷えにはくれぐれもご注意ください。

担当：岡田 富貴（鼻炎で苦しい毎日です）

編集後記

インターネットでの情報伝達が盛んになってきました。本学会も、会員のみならず一般の人への情報公開の場としてホームページを飛躍的に発展させる必要があります。日手会誌が電子ジャーナルになって、会員が閲覧したりダウンロードしたりできるようになると、とても便利になります。また、一般の人のニーズ（疾患の説明など）にも答える必要があります。日本手の外科学会のメッセージを世界へ向けて発信しましょう。4月に大阪、6月にヨーロッパ、11月に大阪でお会いしましょう。

（文責：高原政利）

広報委員会

（担当理事：伊藤恵康 委員長：田中寿一 委員：池上博泰，島田幸造，鈴木 康，高原政利，谷口泰徳）